近江鉄道の電車を見ながらゆったりと散歩をする親子、西側の街並みにも変化が見られ、東側では駅前のえいとテラスでカフェを楽しむ学生たち、時には盛大にイベントが開催され多くの人が集まり笑顔があふれる様子は、活力のあるまちの姿であり、これまで通り過ぎていた場所から行きたくなる場所へと変わり、活気ある中心市街地の姿を思い描いています。

都市基盤が整った快適なまち

Q ①ＪＲ琵琶湖線の利用促進につながる能登川駅東口の道路整備は。
②新幹線新駅を市内に設置する考えは。

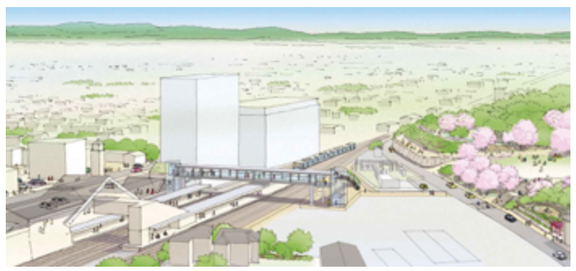
A ①ＪＲ琵琶湖線の利用促進のためにも、ＪＲ能登川駅周辺の整備は引き続き必要です。ＪＲ能登川駅の正面玄関は東口と認識していますが、十分な整備ができておらず、計画的に整備を進める考えです。
②新幹線新駅の設置については、新駅設置検討調査を実施し、その可能性を探ってきました。本市のみならず、滋賀県の飛躍的な発展のためには米原京都間の中央部に新駅の設置は絶対に必要であると考えています。
今後は、リニア中央新幹線の整備による東海道新幹線の役割の変化や北陸新幹線のルート決定の動向を踏まえ、新駅設置の機会を逃すことのないよう、状況を注視していきます。

日本共産党議員団
田郷　正

暮らし、福祉、教育最優先へ

Q 市長は「市民が安全で質の高い暮らしを享受できる、強く豊かで、そしてやさしい東近江市の創生に向けて予算を編成した」としているが、市民生活や福祉・教育に冷たく、大企業優遇、公共事業最優先の市政と言わざるを得ない。
①小中学校体育館へのエアコン設置を早急にすべきでは。
②保育・幼児施設と中学校の給食費無償化についての考えは。
③森の文化博物館基本計画を見直すべきでは。
④大企業への企業立地や雇用促進奨励金はやめるべきでは。
⑤近江鉄道八日市駅東西連絡通路計画などは見直すべきでは。

A ①計画的に全校での設置を目指したいと考えています。
②給食賄材料費は保護者負担を基本とし、一般財源を充てた無償化は考えていません。
③「森の文化推進条例」が可決されており、計画を見直すべき理由はありません。
④企業誘致や設備投資には重要な要素であり、地域経済活性化と財源確保による市民福祉の向上に取り組んでいきます。
⑤中心市街地活性化には必要不可欠な事業であり予定通り進めます。



近江鉄道八日市駅東西連絡通路基本構想より

太陽クラブ
戸嶋　幸司

新年度予算および主要事業について

Q 一般会計当初予算額が過去最大の556億円となった要因と長期的な財政の見直しに対する市長の見解は。

A 当初予算額が過去最大となったのは、長引く物価高騰への対策をはじめ、人件費や物件費の増加や扶助費などの社会保障経費が増加したことによるものです。さらに、令和8年度は新たな総合計画のスタートとして、主要施策の着実な実施と子育て・福祉・教育施設の整備とともに、10年、20年先を見据えたまちづくりに新たな布石となる事業の構想などにも着手することが要因です。
一方で、予算編成に当たっては、基金の取崩額を抑制するなど、財政の健全性と施策の推進の両立を図る予算としています。
今後の財政運営の考えについては、合併から20年という節目を経て、持続可能な市政運営を推進するためにも、今後もより健全で強固な財政基盤を確立していきます。
今後も物価上昇などによる予算規模の拡大は避けられないものの、事業の選択と集中により、本市のさらなる発展を目指します。さらに、市民が真に豊かさを実感できる施策を実施していくためには、その基盤となる財源の安定確保が不可欠であり、積極的な企業誘致と地域経済の活性化により市税収入を確保し、人口減少社会においても揺るぎない、強く豊かで持続可能なまちづくりを進めていきます。

Q 本市の中心部として整備が続いている近江鉄道八日市駅周辺だが、
①これまでの取り組みの振り返りや新年度の事業への意気込み、描く未来の姿についての市長の見解は。
②八日市駅東西連絡通路の概算事業費および財源の内訳は。

A ①市長就任当時の八日市駅周辺は、にぎわいのあるまちには程遠い状態であり、かつてのにぎわいをよみがえらせたいとの強い決意のもと、自ら先頭に立ち、ホテル誘致に始まり、延命新地の道路の美装化や駐車場の整備に取り組み、観光案内や商工会議所が入るマンションの完成など、にぎわいが少しずつ感じられるようになりました。
本市の中心市街地は、まだまだ飛躍できる大きな可能性があると考えており、新年度には、延命公園の再整備と八日市駅の東西連絡通路整備の設計を連動させ、駅を核としたまちの一体化によるさらなる魅力向上を目指し、これからも中心市街地の活性化に向け、精力的に事業を推進していきます。
②概算事業費は10億円で、内訳として社会資本整備総合交付金5億円、地方債3・7億円、一般財源1・3億円を計画しています。

Q 森の文化の魅力発信について、奥永源寺にある「木地師やまの子の家」が森の博物館になるという認識で間違いはないか。

A 「自然・歴史文化などの地域資源が分布している区域一帯を博物館とする」と基本計画にも明記しており、やまの子の家が博物館ではありません。非常に広いエリアの情報を各所で発信していくに当たり、観察会の拠点や調査研究を行う場所として木地師やまの子の家を既存施設として活用しようとするものです。

活用予定の木地師やまの子の家